教 材 研 究 の 基 礎

―『大鏡』師輔伝 ―

勝 倉 壽 一（国　文　学）

高等学校の古典教材としてよく知られた作品に『大鏡』第３巻「右大臣師輔」伝のいわゆる「かはらけ事件」の逸話がある。村上天皇の中宮安子が，宣耀殿の女御芳子の美貌と帝の寵遇に嫉妬して，隔ての壁に穴を開けて土器の破片を打ちつけたのを，機嫌を損ねた帝が安子の兄弟に謹慎処分を命じたところ，安子は帝に迫って処分を取り消させたという。

この逸話は多くの教科書に載せられているが，福島県内の高校において採択されているのは，旺文社『高等学校　国語Ⅱ』，角川書店『高等学校　古典Ⅰ』，及び教育出版『古典Ⅱ』である。

しかし，前の２種の教科書が，「安子の嫉妬」という教材名で「かはらけ事件」の逸話を収めているのに対して，教育出版『古典Ⅱ』は「中宮安子」の題のもとに収め，次いで安子の嫉妬の対象となった宣耀殿の女御芳子と村上帝の愛情模様を語る第２巻「左大臣師尹」伝の逸話を「宣耀殿の女御」の題で収めている。

この編集方針の違いを各社刊行の「指導資料」によって見ると，前の２教科書は安子の嫉妬深さ・気性の激しさ，また，寛容さと恩情豊かな人間性を捉え，人のよい恐妻家である帝との，男女の愛情問題を指導の中核に据えているのに対し，後者は安子の逸話を藤原一門内部の権力争いを背景とした，安子の父師輔（九条家）と芳子の父師尹（小一条家）の激しい対立・反目の反映として捉えることから教材解釈を行っている。

言うまでもなく，『大鏡』は，多くの印象的な説話を連ねて，平安朝廷における道長の専権への道の合理的な解釈を語ったものであり，その説話はいずれも当時の複雑な政治的状況と，熾烈な権力争いを背景において語られたものである。その作品世界は当時の政治的状況と，権力争いの歴史的事実を踏まえることにおいて初めて理解することができる。そのことはまた，歴史物語である『大鏡』の文学史上の位置について，正確な理解を与えるための必要条件でもある。

本稿は，古典教材である『大鏡』師輔伝の説話の理解に資するために，教材研究にあたって踏まえるべき基礎的要件である当時の政治的状況と，権力争奪の様相を中心において作品解釈を行ったものである。

〔キーワード〕教材研究　歴史物語　大鏡　安子

1．は じ め に

『大鏡』の作者が藤原氏の栄華と専権への道筋について語ろうとするとき，後宮に絶大な勢威を振るい，当代の政治に関与した２人の后，村上皇后安子（藤原師輔女，冷泉・円融母后）と，円融后詮子（藤原兼家女，一条母后）の事績に多くの筆を費やしたことは，故のないことではない。第３巻「右大臣師輔」伝が，九条流の祖である師輔の事績に先立って安子関係の逸話を語っていることも，のちの道長に至る九条流の栄華の系譜における安子の位置の重さを物語っている。

同じく，藤原氏の栄華を語る『栄花物語』の巻第１「月の宴」が藤原北家九条流の栄華の歴史の始発の巻であり，その発展の様相を語ることに主題を据えて，村上天皇と師輔一女中宮安子とのめでたき有様を描くために１巻の３分の２の分量を費やし，最高の栄位にあって至福に満ちた日常を詳述していることは，先学の説かれたところである。[1] 安子の懐妊，憲平親王（冷泉）誕生の喜び，憲平立太子，安子立后などの記事が連続して語られるのも，主題の一貫性を証する。また，同書における安子の御悩から崩御・葬送・追慕に至る崩御関係記事が，村上帝や師輔のそれに数倍する分量と具体的・迫真的な描写を尽くしていることも，既に指摘がある。[2]

さらに，安子の突然の崩御の報に接した帝の悲嘆のさまは，『村上天皇御記』康保元年４月29日の条に詳しい。

> 以応和四年四月廿四日，於主殿寮庁誕生女児，今日巳刻終于同寮，時年三十八，在后位七載，夫栄耀無常，運命有限，何処避之，誰人永存，然而弘

仁以来，無為正妃之皇后，当時殞命之者，今配偶之後廿有五年，共衾裯，同枕席，多経春秋，況聞嬰孫児子比肩恋哭，先言涙下，何日何時敢慰心腹乎・・・[3]

蘇生の報の束の間の喜びから崩御を確認した帝の沈痛な哀惜の情の吐露と，記録の詳細さは，「聞しめして，すべて何事もおぼえさせ給はず，御声をだに惜しませ給はず，ゆゝしきまで見えさせ給ふ御有様也。[4]」という『栄花物語』の平凡な記述を凌駕すること数等であろう。

これに対して，安子の事績を語る「師輔」伝には，九条流の栄華を決定づけた憲平親王誕生の喜びや，憲平立太子，安子の立后，安子の死に寄せる九条一門の悲嘆のさまなど，栄華の道を邁進する九条流の哀歓についての記述は一切見当らない。むしろ，村上後宮における后妃の多さや，宣耀殿女御芳子（藤原師尹女）の寵遇をめぐる帝と安子の確執，安子の政治介入，さらには重明親王妃登子（師輔女）に寄せる村上帝の異常な執心ぶりなどの好色談的な記述が多い。

その第一のエピソードをなすのが，芳子に対する安子の嫉妬の激突を語る，いわゆる「かはらけ事件」である。芳子の美貌と村上帝の寵遇に嫉妬した安子が，隔ての壁に穴を開けて土器の破片を打ちつけた。その行為に機嫌を損ねた帝は直ちに安子の兄弟を謹慎処分に付するが，安子は帝に迫ってその処置を撤回させたという。この逸話は他の史書類には見られず，『栄花物語』にも安子と芳子の対立を示唆する記述はない。『大鏡』作者の創作と見るべきものであろう。『十訓抄』『康頼宝物集』に事件の概略が記されているが，これは『大鏡』の説話を要約したものであろうか。

安子の「かはらけ事件」は，次に続く安子の後宮支配と政治介入，及び村上帝の登子への懸想問題と一体のものとして語られている。従って，「かはらけ事件」は村上帝の好色性と安子の異常な嫉妬深さを語るのみならず，藤原北家と皇孫源氏，北家内部における九条家と小野宮家，小一条家が対立・拮抗する外戚政治の酷薄な現実をも暗示するものであったと思われるのである。

2．村上後宮と安子

「師輔」伝の安子関係記事は，「第一の御女，村上の先帝の御時の女御，おほくの女御・みやすどころのなかに，すぐれてめでたくおはしましき。[5]」という，村上後宮における后妃の数の多さと，安子の勢威の記述から始まる。

村上帝の后妃・皇子女の数については『簾中抄・上』に「后女御更衣十人，男女の御子十九人[6]」とある。他の帝の場合を，同じく『簾中抄』の記載によって見れば，文徳帝「女御六人，みこ二十九人」，清和帝「女御十三人，みこ十八人」，光孝帝「女御四人，男女のみこ四十一人」，醍醐帝「女御更衣二十一人，御子三十六人」とあり，村上後宮の后妃の数が特に多いとは言えない。

しかし，他の帝については「おほくの女御・みやすどころのなかに」（『大鏡』），「女御達あまた参り給へる中に」（『栄花物語』）というような，后妃の多いことを強調する記述は見られない。『大鏡』においても安子関係記事の特異さを示すものとして見逃しえないであろう。このことはまた，村上帝の好色性を語るのみならず，それだけに激しい貴族間の争いを生んだ外戚政治の現実を語っていると言うことも出来る。

いま，村上帝の后妃を『一代要記』[7]の記載に拠って列記すれば，次のようになる。

皇后藤原安子（師輔女，天慶３年４月19日配合，天慶９年５月27日村上即位により女御，天徳２年10月27日中宮）
女御藤原述子（実頼女，天慶８年11月５日入内，天慶９年12月27日女御，天暦元年５月３日卒）
同　徽子女王（醍醐皇子式部卿重明女，天暦２年２月入内，天暦３年４月７日女御，承香殿女御）
同　庄子女王（醍醐皇子中務宮代明女，麗景殿女御）
同　藤原芳子（師尹女，天徳２年10月28日女御，宣耀殿女御）
更衣源計子（広幡中納言庶明女，女御）
同　藤原正妃（按察大納言在衡女，按察の御息所）
同　藤原祐姫（元方民部卿女）

他に脩子，有序，尚侍には貴子，灌子があり，のちに藤原登子（師輔女，重明親王室）が入内して貞観殿尚侍と称した。

このうち，小野宮左大臣実頼三女の女御述子については，『大鏡』第２巻「太政大臣実頼」伝に「このおとゞの御女子，女御にてうせ給にき。村上の御時にや，よくもおぼえはべらず。」と記されるのみである。そっけない扱いになったのは，当時の政治力学に作用しなかったためであろう。

また，重明親王女の女御徽子女王については，第６巻「太政大臣道長下」の「昔物語」に徽子の弾く琴の音に引かれて，久しく渡らなかった村上帝が局を訪ねたところ，徽子は「秋の日のあやしきほどのゆふぐれに，おぎ吹風のをとぞきこゆる」という自作の歌を弾いていたので，天皇も深い感慨を覚えたという哀艶な響きを帯びた話がある。安子・芳子・登子らの勢威と寵遇の陰に忘れられた妃の哀話である。

ところで，『大鏡』の安子関係記事の分析に先立って，『栄花物語』の関係記事の構成を見ると，次のようになる。

・多くの女御の中で第一の女御であったこと。

・安子，承子内親王を出産。4歳で死去。
・安子の懐妊と憲平親王出産。祐姫腹の第一皇子広平親王を擁する元方民部卿の衝撃と落胆。
・憲平親王の立太子。
・安子立后。
・元方民部卿，広平親王，祐姫の相次ぐ死。憲平親王の異常性格と，元方の霊の祟りとする噂。
・安子の懐妊と御悩。祈禱と元方の霊の跳梁。選子出産と崩御のこと。葬送のこと。

その間に安子腹の為平親王の立太子不成立のこと，安子の妹登子と村上帝の情事の話が含まれる。

このうち，『栄花物語』作者の関心の強さに注目されるのは，元方民部卿の怨念に関する記事である。

> かくて東宮四つにおはしまし丶年の三月に，元方大納言なくなりにしかば，そのゝち，一の宮も女御もうち続きうせ給にしぞかし。そのけにこそはあめれ，東宮いとうたてき御もの丶けにて，ともすれば御心地あやまりしけり。

記録によれば，元方は憲平親王出生の3年後に死去しており，安子立后はその5年後，広平親王の死は元方の死後18年目のことである。その間には，安子の崩御，村上帝の退位，崩御，冷泉帝の即位，退位，円融帝の即位などの，多くの歴史の転回が存在する。また，広平親王と祐姫が同時期に死去したかは定かではない。

しかし，『栄花物語』本文の「『うち続きうせ』は，史実はともかくやはり底本のように『一の宮も女御も』を受けるのが文脈としては穏やかである。[8]」から，東宮憲平が4歳の時に元方父娘，親王が相次いで死去し，怨霊となったとする『栄花物語』の史実無視の書き方は，意図的と言わなければならない。

安子の御悩から崩御への展開にも，元方の霊の跳梁ぶりが語られる。

> 御もの丶けどもいと数多かるにも，かの元方大納言の霊いみじくおどろおどろしく，いみじきけはひにて，あへてあらせ奉るべきけしきなし。東宮をもいみじげに申し思へり。

『栄花物語』においては，元方の霊は憲平親王に祟って狂疾の気を生じさせたのみならず，安子の御悩と崩御，村上帝の御悩と崩御，冷泉院の女御超子の頓死の際にも祟りをなし，長く九条流に取り憑いて宮廷社会を震撼させている。

これに対して『大鏡』では「師輔」伝における師輔との確執が元方の怨霊化の因として語られてはいるが，元方の霊が冷泉院に祟ったことは後に第4巻「内大臣道隆」伝に語られるのみであり，村上帝，安子の御悩と崩御への跳梁のことは記されていない。むしろ，第3巻「太政大臣師尹」伝では小一条院の東宮辞退の際に「この院のかくおぼしたちぬる事，（略）おほくは元方の民部卿の霊のつかうまつるなり」とあって，道長の謀略に手を貸しているかに見える。

『大鏡』の安子関係記事の特異さは，『栄花物語』が筆を尽くして記した，九条流の繁栄を約束する冷泉出生の政治的意味と，九条流に対する元方父娘の怨念への関心が薄く，代わりに「かはらけ事件」をはじめとする安子の強い個性と，その政治介入，及び帝の登子への懸想問題への対応など，九条流の権力掌握への道を注視するところに認められるのである。

3.「かはらけ事件」の背景

『大鏡』の後宮関係記事の中でも最も印象的ないわゆる「かはらけ事件」は，いかなる時期と政治的背景のもとに起こったのであろうか。

まず，事件出来の時期について見ると，『栄花物語』「月の宴」に村上帝が芳子に箏の琴を教授していた時，「女御の御はらからの済時の少将，常に御前に出でつゝ，さりげなくきゝける程に」自然に習得し，見事に弾奏したとある。この済時が左近少将に任じたのは，応和元年（961）8月7日の事である。従って，「かはらけ事件」は応和元年8月から同4年（康保元，964）4月の安子の崩御までの3年半程の間の出来事であったと想定される。[9]

これに先立つ天徳4年（960）5月4日，右大臣・正二位の九条家師輔が53歳で薨去した。残された師輔の子女と皇太子憲平親王（9歳）を取り巻く台閣，後宮の状況は次のようになる。

左大臣・正二位の位にあった小野宮家藤原実頼は61歳で，女の女御述子は既に天暦元年（947）に薨じていた（『日本紀略』）。述子は皇子女を儲けておらず，一男敦敏も同年に死去していた。こののち，応和3年（963）に二男頼忠が参議・従四位上として台閣に名を連ねることになるが，実頼には台閣・後宮ともに政治的な足掛かりは乏しい。

更衣正妃を擁する藤原在衡は大納言・正三位で69歳であった。正妃はのちに三の宮（敦平）を生む。

同じく大納言・正三位の源高明（醍醐帝第一源氏）は47歳で，のちに安子腹の四の宮（為平）を女婿として外戚の道を窺うことになる。

小一条家藤原師尹は権大納言・正三位で41歳である。女芳子は天徳2年（958）女御として入内しており，のちに六の宮（昌平），八の宮（永平）を生む。

これに対して，師輔の薨去時，九条家では皇太子憲平を後見すべき公卿はなく，一男伊尹が従四位上で37歳であったが，師輔の死により8月23日参議に任じ，左近中将を兼ねている。弟の兼通は，師輔の逝去時は従四位下・中宮亮で36歳であり，応和4年の時点では中宮権大夫に任じている。兼家は正五位下・小納言で31歳であったが，応和4年の時点では左京大夫であった。従って，応和4年（964）の安子崩御までの間では伊尹一人が台閣に名を連ねていたことになる。いずれ

も，中宮と皇太子の外戚としては勢威に乏しい。

また，村上帝の皇子は，次の通りである。[10]

一の宮（広平）　天暦４年（950）生，元方女祐姫腹。

二の宮（憲平）　天暦４年生，安子腹，同年７月立太子，のちの冷泉帝。

三の宮（致平）　天暦５年（951）生，在衡女正妃腹。

四の宮（為平）　天暦６年（952）生，安子腹。

五の宮（守平）　天徳３年（959）生，安子腹，のちの円融帝。

六の宮（昌平）　天暦10年（956）生，師尹女芳子腹，応和元年死去，６歳。

八の宮（永平）　生誕年不明，芳子腹。

七の宮（具平）　康保元年（964）６月生，代明女庄子腹，安子の死後の出生。

九の宮（昭平）　天暦８年（954）生，正妃腹，天徳４年賜姓源氏。

このことから見れば，「かはらけ事件」が起きた頃の台閣で，九条流の対抗者と見なされるのは実頼，在衡，師尹，及び皇孫源氏の実力者源高明らであり，親王を有する有力者はのちに四の宮（為平）を女婿とした高明と六の宮（昌平）を擁する師尹である。一の宮（広平）の外戚である大納言藤原元方は，既に天暦７年に死去している。また，三の宮（致平）を擁する按察大納言在衡は70代の高齢であり，その一男国光は正四位下・治部卿・近江守を極官として台閣に地歩を得ていない。

四の宮為平親王は安子崩御の時は12歳で，安子崩御後の康保３年に高明の女婿となっている（『村上天皇御記』）。『栄花物語』では安子の存命中に村上帝の譲位の意向が示され，その折，帝と安子の寵愛にもかかわらず為平を将来帝位につけるには支障があり，守平を皇太弟にする話が起こったと記しているが，松村博司氏はこの記事の史実性に疑問を提起し，これを康保元年の話と推定している。[11] 高明はのちに安和の変の謀略により排除されることになる。

一方，芳子腹の六の宮（昌平）の生年は未詳であるが，『日本紀略』の応和元年８月23日の条に「無品昌平親王薨。年六。今上第六子。」とあり，「かはらけ事件」の想定年次に重なる。また，同じく芳子腹の八の宮（永平）は永延２年10月13日に24歳で薨じており（『尊卑分脈』），逆算すれば康保２年の出生ということになる。従って，安子の「かはらけ事件」は六の宮を擁する芳子への嫉妬，または六の宮を失って悲嘆に暮れる芳子への帝の愛情が昂まったことへの反感によるものと見ることが出来る。

しかし，「かはらけ事件」そのものは『大鏡』作者の虚構であると推測されるが，上述の史実に重ねて見れば，既に天暦４年に乳児の憲平の立太子を果たし，天徳２年には自ら皇后に冊立された安子が，愛児を失って悲嘆に暮れる芳子に対して，嫉妬のあまりに暴力行為に走るのは不自然である。芳子腹の八の宮（永平）出生の時期は安子の崩御後と見るべきであるが，[12] 物語世界の構図は帝の芳子寵愛と，昌平または永平を擁する小一条家師尹への警戒心が「かはらけ事件」を誘発したと見るべきであろう。

この暴力行為に機嫌を損ねた村上帝は，即座に九条一族の伊尹，兼通，兼家を謹慎処分に処する。このことは，台閣に参議伊尹を擁する九条流の排除と憲平親王の後見勢力の後退を意味することになる。安子にとっても緊急の事態であった。安子は村上帝に直談判し，強引に処分を撤回させるとともに，後宮から帰参許しの宣旨を出させるという異例の政治介入をはかる。

「かはらけ事件」は，皇孫源氏の排斥を狙った安和の変に対応する，九条流と小一条流との確執の説話化を意図したものであると言ってよいであろう。

4．「かはらけ事件」の解釈

安子関係の記事は，村上帝をひどく遠慮させ，無理難題をも通させた安子の個性の強さと，それを背後で支える九条家の力の存在を暗示し，村上帝の治政の内実を暴露することから始まる。

> みかどもこの女御殿にはいみじうをぢまうさせたまひ，ありがたきことをも奏せさせ給ふことをば，いなびさせたまふべくもあらざりけり。いはんや，自余の事をば，まうすべきならず。すこし御心さがなく，御ものうらみなどせさせ給ふやうにぞ，よその人にいはれおはしましし。みかどをもつねにはふすべまうさせ給て，・・・

藤原北家九条流の栄華の道を磐石のものとした皇后安子の人物像を，否定的側面から描いていく異常さに注目しなければなるまい。「ありがたきこと」「自余の事」が，安子の専横の振舞と後宮による政治介入を暗示していることは言うまでもない。

作者は，まず意地悪で嫉妬深い安子の性格を強調するとともに，ある夜，帝が安子の局に渡られた時，他の妃に心を向けることへの嫉妬心から戸を開けずに追い返したという逸話を紹介する。安子の人柄に対する「よそ人」（世間一般）の取り沙汰を語った後に語り手の秘密話を紹介するという手法は，その特異な人間性を客観的に証拠づけて「かはらけ事件」の導入の働きをなすとともに，事件の信憑性を印象づける構図をなしている。

> いとやすからず，えやしづめがたくおはしましけん，なかへだてのかべにあなをあけて，のぞかせたまひけるに，女御の御かたちいとうつくしくめでたくおはしましければ，「むべ，ときめくにこそありけれ」と御覧ずるに，いとゞ心やましくならせ給て，あなよりとをるばかりのかはらけのわれ

してうたせたまひければ，みかどのおはしますほどにて，こればかりにはえたへさせたまはず，むづかりおはしまして，「かうやうのことは，女房はせじとて。伊尹・兼通・兼家などがいひもよほして，せさするならん」とおほせられて，みな殿上にさぶらはせたまふほどなりければ，三所ながらかしこまらせたまへりしかば・・・

帝の臨席する場において，その寵妃に器物の破片を投げつけるという傍若無人な行為は，帝の体面を汚すのみならず，芳子に侮辱を受けた師尹方の憤激を呼び起こす。後宮の秩序と帝の権威を保つために安子への処分は避けられない。しかし，この行為が安子の異常な嫉妬心に発することは「心さがなく，御ものうらみなどせさせ給ふ」安子の性格から想定しえたにもかかわらず，帝は「伊尹・兼通・兼家などがいひもよほしてせさする」ものとして，謹慎処分に付する。「かうやうのことは，女房はせじ」という帝の判断は，東宮（憲平）の母后の権威への配慮と，安子に「いみぢうをじまうさせたま」う遠慮心からであったであろう。

しかし，この処分はただちに九条流の危機に繋がる。安子の暴力行為を，その外戚である伊尹ら九条兄弟の教唆によると断ずることは，事件を後宮内部の嫉妬沙汰に止めず，九条家による小一条家への圧迫または挑発行為と認めるに等しい。帝の芳子寵愛と芳子腹の昌平または永平の存在を考えれば，事は九条流から小一条流への帝の心変わりを示すものとも解せられるからである。

これに対する安子の反応は，「いとゞおほきにはらだゝせたまひて」「たびたび『なをなを』と御消息ありければ」「たゞいまめしかへせ」「せめまうさせたまひければ」「御衣をとらへたてまつりて，たてたてまつらせたまはざりければ」などの執拗な処分取消し要求から，皇后の兄弟に対する宥免処置を強要して，「いみじからんさかさまのつみありとも，この人々をばおぼしゆるすべきなり。」とまで言い募るに至る。違法・悪逆の行為をも黙過せよという強要に，『大鏡』の作者は「これのみにもあらず，かやうなる事どもおほくきこえ侍しかは。」と述べて，安子の専横の振舞と政治介入の具体的事実の存在を裏付ける。

「かはらけ事件」として語られた安子と芳子の争いは，伊尹・兼通・兼家ら九条家師輔の遺児たちと小一条家師尹の権力争いを代行したものであった。帝の嫡妻による寵妃への嫉妬と迫害は，そのまま宮廷社会における権力闘争そのものであったからである。

従って，安子の暴力に対する伊尹・兼通・兼家の謹慎処分は，九条流の勢力伸長に対する村上帝の天皇権力（王権）の行使を意味していた。村上帝は延長4年（926）の生まれであり，「かはらけ事件」の想定年次当時は35歳から38歳に当たる。即位後15年を経過して治政は円熟期を迎えており，外祖父忠平の薨去後はその息である小野宮家実頼，九条家師輔，小一条家師尹，及び皇孫源氏などの微妙な勢力のバランスの上に村上朝廷は営まれていた。しかし，九条流の伸長を抑止する村上帝の意図が安子の厳しい拒絶のために挫折することにより，天皇権力は決定的な失墜を示し，安子を中心とする九条流の実質的な政権支配が進行していくことになるのである。

「師輔」伝における村上帝の扱いについて，目加田さくを氏は，

師輔伝において，形成される村上像は，甚だしい好色漢であり，自主性のない，一女御の専横のままに動かされ，剰え，一女御に政治に迄くちばしをさしはさまれるような，甚だ腑甲斐ない天皇像を，熱意と興味をもって，長々と，具さに形成しあげる。[13]

と説いているが，村上朝の政治を壟断した安子と九条流の政治介入の典型例として語られるのが，村上帝の好色性を利用した登子への懸想問題の処理である。

5．登子への懸想

登子は村上帝の兄宮式部卿重明室であるが，かいま見てその美貌に魅惑された村上帝は安子に懇請して密会を重ねる。重明親王は天暦8年（954）に薨去され，また安子も応和4年（964）に崩御すると，帝はただちに登子を尚侍に迎え，周囲の困惑や非難も顧みずに寵愛するに至る。

このきさきの宮の御おとゝの中のきみは，重明式部卿の宮の北方にておはしましゝぞかし。その親王は，村上の御はらからにおはします。この宮のうへ，さるべき事のおりは，ものみせたてまつりにとて，きさきのむかへたてまつりたまへば，しのびつゝまいりたまふに，みかどほの御覧じて，いとうつくしうおはしましけるを，いといろなる御心ぐせにて，宮に，かくなむおもふと，あながちにせめ申させたまへば，一二度，しらずがほにて，ゆるし申させたまひけり。さてのち御心はかよはせ給へる御けしきなれど，さのみはいかゞとやおぼしめしけん，きさき，さらぬことだに，このかたざまはなだらかもえつくりあへさせたまはざめるなかに，ましてこれはよその事よりはこゝろづきなう〔も〕おぼしめすべけれど，御あたりをひろうかへりみ給御こゝろぶかさに，人の御ためきゝにくゝうたてあれば，なだらかにいろにもいでずゝぐさせたまひけるこそ，いとかたじけなうかなしき事なれな。

『栄花物語』によれば，帝と登子の密会は重明親王の存命中に始まり，安子の崩御後まもなく九条家に登子の参内を強要している。宮中に迎えてのちは後宮の秩序を無視した寵愛ぶりであり，朝政も懈怠がちで，関白実頼を嘆息させるほどであったという。

しかし，『大鏡』の作者は，帝の登子への懸想問題を村上帝の皇后であり登子の同母姉である安子の側から語り，自らの感情を押し殺して醜聞の鎮静に腐心する安子の「かたじけなうかなしき」対応を描いている。しかも，帝の登子への懸想は10年余にわたるものであり，その執心の強さが窺われるが，その間に宣耀殿女御芳子の入内と，帝の芳子寵愛に嫉妬した安子の「かはらけ事件」が起こることになるのである。

『栄花物語』『大鏡』に詳述された村上帝と登子の密会の事実や懸想問題は史書類に見当らないが，『大鏡』の作者が村上帝の登子に寄せる異常な執心ぶりを描きつつ，同時期に芳子に対する安子の「かはらけ事件」を構想した意図は単純ではあるまい。東宮の母后として皇后に冊立された安子が，嫉妬に狂って芳子への暴力行為に走る異常な嫉妬ぶりと，妹登子に対する帝の執心への寛容な態度との殊更な対照には，『大鏡』作者の意図的な匂いがする。

即ち，村上帝の登子への懸想問題は，登子を宮中に呼び迎えて村上帝の「いといろなる御心ぐせ」を刺激し，帝の好色癖を利用して九条流に繋ぎ止める意図を含むものであると推測されるのである。宮中の催し事を利用して登子を宮中に招き，一，二度の密会は黙認しつつ，以後は登子の参内を止めて帝の執着心を昂めるという処置に，安子と九条家の計画性を読み取ることは容易であろう。

> さてきさきの宮うせさせおはしましてのちに，めしとりて，いみじうときめか〔さ〕せ給て，貞観殿の内侍のかみとぞ申しかし。よになくおぼえおはして，こと女御・みやすどころそねみ給しかども，かひなかりけり。これにつけても，「九条殿の御さいわい」とぞ，人申ける。

芳子に対する「かはらけ事件」は，九条流と小一条流の勢力争いの代理戦争であり，九条流の強烈な敵愾心の現れであったと見ることが出来る。一方で，九条家は村上帝の登子への執心を利用し，台閣の受け止め方や世間の風評を冷静に計算しつつ，徐々に既成事実化を図る。しかも，安子の存命中に後宮に入れるのではなく，安子の死後に尚侍として入内させ，帝の寵遇を繋ぐことにより，いまだ台閣に地位を確立していない安子崩御後の九条家の権力保持のために登子を利用したのである。

それは計算どおりの結果を生み，登子が帝の寵愛を独占することにより，他の后妃の栄達を防ぎ，芳子への寵愛を冷却させることに成功する。「師尹」伝には，安子の死後まもなく帝の芳子への寵愛が冷え，登子の入内を強要して寵愛したことが語られている。その背後で，伊尹らは皇孫源氏の実力者である源高明の排斥を策し，守平の立太子をはかって，師尹の野望の可能性を封じることに成功する。[14] 守平立太子に一役買ったのは登子であるとする説もある。[15]「九条殿の御さいわい」は偶然の契機からの僥倖ではなく，安子とその兄弟妹らのしたたかな計算と実行力の結果であると言ってよいであろう。

6．九条流の専権への道

物語世界は，次いで安子の包容力に富む人柄の紹介へと転回する。この転換については人物描写の違和感を指摘しつつ『大鏡』作者の「多値的描写」や「人間観察の部厚さ」を認める見解もあるが，[16] 先述した安子像と表裏の関係を持つ統一的な人物像の形象として捉えるべきである。

> おほかたの御心はいとひろく，人の御ためなどにもおもひやりおはしまし，あたりあたりに，あるべきほどほどすぐさせ給はず御かへりみあり。かたへの女御たちの御ためもかつはなさけあり，御みやびをかはさせたまふに，こゝろよりほかにあやまらせたまひぬるときの御ものねたみのかたにや，いかゞおぼしめしけん。この小一条の女御は，いとかく御かたちのめでたくおはすればにや，御ゆるされにすぎたるおりおりのいでくるより，かゝる事もあるにこそ。

自らの身辺に仕える者，その意向に従順な妃たちに対しては寛容な態度で接し，恩情をかけるが，その制御の枠を越えた振舞に対しては，強烈な反発を示し，圧迫を加えるというのである。「かはらけ事件」は芳子の美貌への嫉妬ばかりではなく，「御ゆるされにすぎたるおりおりのいでくるより」厳しい対応を招いたのであった。即ち，帝の常軌を逸した寵愛ぶりと，寵遇を笠に着て妃の分を越えた振舞，それを頼みとする対抗勢力の増長に対しては，帝の嫡妻，東宮の母后として全力で圧迫を加え，徹底した排除の方針を持つ。それが安子の後宮支配の内実であった。

> おほかた殿上人・女房・さるまじき女官までも，さるべきおりのとぶらひせさせ給ひ，いかなるおりもかならずみすぐし〔きゝ〕はなたせたまはず，御覧じいれてかへりみさせ給ひ，まして御はらからたちをばさらなりや，御あにをばおやのやうにたのみ申させたまひ，御をとゝをば子のごとくにはぐゝみたまひし御こゝろをきてぞや。されば，うせおはしましたりし，ことはりとはいひながら，ゐなか世界まできゝつぎたてまつりて，おしみかなしび申しゝか。

ここに語られるのは，安子の心配りと九条流の兄弟姉妹の結束の見事さであろう。安子は殿上人や女房から物の数でない女官にも祝儀不祝儀の見舞いを欠かさず，悩みや愚痴，訴えに耳を傾け，地方の受領階級にまで敬慕の輪を広げていく。周到な人心収攬策と言うべきである。また，兄弟の結束と長幼の序に心を配ったこと，兼通の関白就任の遺命を残したこと（「太政大臣兼通」伝）や，異母弟の公季を宮中で養育し，冷

泉・円融などの実子の親王方と同等に扱ったこと（「太政大臣公季」伝）にも認められる。いずれも，九条流の基盤形成と，来るべき東宮（冷泉）の治政への布石であると言ってよい。

父師輔の薨去後，九条家はわずかに長兄伊尹が参議として台閣の末席に名を連ねているのみであり，伊尹自身も冷泉の即位まで7年間にわたり昇進を止められていた。安子の恩情と圧迫を配した後宮支配と宮中における巧みな人心の掌握により，九条家は帝をその掌中に握り，専権への道を固めていくことになるのである。

> みかどよろづのまつりごとをばきこえさせあはせてせさせたまひけるに，人のためなげきとあるべき事をばなをさせたまふ，よろこびとなりぬべきことをばそゝのかし申させたまひ，をのづからおほやけきこしめしてあしかりぬべき事など人のまうすをば，御くちよりいださせたまはず。かやうなる御心おもむけのありがたくおはしませば，御いのりともなりて，ながくさかへおはしますにこそあべかめれ。

村上朝廷の治政の具体的な内実であるが，ここに記される「人」の「なげき」「よろこび」が九条家の利害得失を指すと見るならば，安子の政治介入を語る『大鏡』作者の意図は明瞭である。村上の治政は万機が安子の同意を得て運営されたのであり，師輔の存命中はその権威が安子を通して帝の意向に反映され，師輔亡き後は実頼・師尹・高明らの台閣との二頭政治，または帝を通じて九条家の意志が台閣に影響力を確保していたと言うのである。安子と合意の上でなければ何事も決裁出来ない後宮政治の現実が語られている。九条家の意を帯した安子の合意と帝への助言，更には蔵人や女官に対する言論統制や帝への情報操作に至るまで，それは徹底していた。

かくして，安子関係記事は，

> 冷泉院・円融院・為平式部卿宮と女宮四人との御母后にて，又ならびなくおはしましき。みかど・春宮と申，たゝ代々の関白・摂政とまうすも，おほくはたゞこの九条殿の御一すぢなり。

という，藤原北家九条流の隆盛と専権の道の礎を築いた安子の功績を確認して終わる。

しかし，安子の奮闘は，外戚政治の酷薄な力学の前に厳しい結果を迎えることになる。その1が四の宮為平の不遇であり，その2は冷泉即位への批判である。

皇孫源氏の実力者である源高明との政治的バランスに配慮した師輔は，先に女三の君を高明の室として姻戚関係を結び，天徳2年の安子の立后の際には高明が中宮大夫をつとめた（『公卿補任』）。また，三の君の逝去後は愛宮を継室に送り込んでいるが，師輔薨去の天徳4年当時はまだ三の君が高明室であったから，愛宮を高明の継室としたのはそれ以後の事である。[17] 師輔の死後も高明との閨閥を必要とした安子・伊尹らの判断によるものであろう。康和3年の四の宮為平と高明女との婚姻も，九条家と高明の政治的な思惑の現れであったと見てよい。

しかし，九条家と高明の政治的な協調関係は，わずか3年足らずで崩壊する。安和2年3月，高明は皇孫源氏の権力失墜を狙った藤原氏の謀略により，太宰権帥に左遷される。いわゆる安和の変であるが，『大鏡』「師尹」伝によれば，謀略の主は高明に代わって左大臣の位を望んだ小一条家師尹であったという。

一方，「師輔」伝は，この変に先立って，康和5年（安和元）の冷泉即位時における，九条家による四の宮為平の立太子阻止と，五の宮守平の立太子の策謀を記している。

> この后の御はらには，式部卿の宮こそは，冷泉院の〔御〕つぎにまづ東宮にもたちたまふべきに，西宮殿の御むこにおはしますによりて，御おとゝのつぎの宮にひきこされさせたまへるほどなどの事ども，いといみじく侍り。そのゆへは，式部卿の宮みかどにゐさせたまひなば，西宮殿のぞうに世中うつりて，源氏の御さかへになりぬべければ，御舅達の，たましひふかく，非道に御おとゝをばひきこしまうさせたてまつらせたまへるぞかし。世中にも宮のうちにも，とのばらのおぼしかまへけるをばいかでかはしらん。

為平を擁する皇孫源氏の勢力伸長を恐れた伊尹・兼通・兼家らの思惑が，為平立太子阻止の理由であるというのである。一方，『日本紀略』によれば，村上帝の崩御時の東宮憲平（冷泉）は，「皇太子始悩心，非尋常。自今日及四月。」「大和国高山寺聖人正祐依召参東宮。勤御修法。以東宮御悩也。」など，狂疾の気が強く，在位期間の短いことを予測した九条家の危機意識の現れであったと見ることも出来る。

かくて，「世おぼえ・みかどの御もてなしもことにおもひまうけさせたまふ」為平は，「冷泉院の〔御〕つぎにまづ東宮にもたちたまふべき」宮として，世間も村上帝も期待していたが，九条家側の策謀により「非道」に立太子を阻止されたという。『大鏡』の作者は，安和の変の起因についても「さてぞかし，〔いと〕おそろしくかなしき御事どもいできにしは。」と述べて，師尹の謀略を陰で操っていたのが九条家であることを暗示する。

冷泉の即位と守平立太子を実現し，高明の左遷と師尹の急逝により台閣における威権を確立した九条家の朝政壟断に対して，関白実頼は『源語秘訣』[18] に所引の『清慎公記』に，次のような批判を記している。後宮に足掛かりを持たない実頼の鬱憤を吐露したものであるが，冷泉即位を強行した九条流のあくなき権勢欲と栄華への妬視が認められる。

> 往代聞武猛暴悪之主。未聞狂乱之君。如此之間。

外戚不善之輩競－成昇進之望。左衛門督云。藤納言望大納言云々。入夜後。右少将為光朝臣来云。明日除目一昨右大将与藤大納言議定畢之由伝承云々。揚名関白早可被停止之者也。

また，『大鏡』の作者は，「師輔」伝の結尾部に「いにしへよりいまにかぎりもなくおはしますとのゝ，たゞ冷泉院の御ありさまのみぞ，いとこゝろうくゝちをしきことにおはします。」と記して，冷泉即位を師輔の栄華の汚点とする評価を示すとともに，道長の言葉として次のように語らせている。

そのみかどのいでおはしましたればこそ，この藤氏のとのばらいまにさかへおはしませ。さらざらましかば，このごろわづかにわれらも諸太夫ばかりになりいでゝ，ところどころの御前雑役につられありきなましとこそ，・・・

憲平親王の出生・即位によって九条流の権勢への道が開かれたのではなく，「道長は廃疾狂気の冷泉院がおいでになったから藤原の栄花が実現したのだと言った」[19] と解される。次の「太政大臣伊尹」伝には民部卿源俊賢の言として「冷泉院のくるひよりは，花山院のくるひはずちなきものなれ。」と語らせている。冷泉・円融・花山・一条と続く皇位の継承過程における九条流の朝政支配を可能にしたのは，安子以後の後宮支配と「くるひ」の帝の即位を強行した結果であるというのである。

第6巻「昔物語」には，

かやうに物のはえうべうべしきことゞもゝ，天暦の御時までなり。冷泉院の御世になりてこそ，さはいへども，よはくれふたがりたる心ちせしものかな。よのおとろふることも，その御時よりなり。

という翁の慨嘆の言葉がある。「昔物語」における作者の冷泉評は，そのまま安子の奮闘によって確立された冷泉から後一条に至る治政の，九条流の朝政壟断による朝廷の権威の衰退への批判意識の表出であると言うことが出来よう。

注

1）甲斐稔「『栄花物語』と藤原安子」（「国学院大学大学院文学研究科紀要」16号，昭和60・3）。新田孝子著『多武峯少将物語の様式』（昭和62，風間書房）685頁。

2）1）の甲斐氏の論。

3）『続々群書類従・第五・記録部』所収。横書きのため返り点を省いた。

4）『栄花物語』の本文の引用は日本古典文学大系『栄花物語・上』に拠る。

5）『大鏡』の本文の引用は日本古典文学大系『大鏡』所収の東松本に拠る。なお，横書きのため，くり返し記号の部分は二度書きにした。

6）『改定史籍集覧・第廿三冊』所収。

7）『改定史籍集覧・第一冊』所収。

8）松村博司著『栄花物語全注釈・一』（昭和44，角川書店）64頁。

9）倉沢千秋『大鏡』における安子考－女の政治性について－」（「大和物語・大鏡探求」昭和60・12）。

10）8）43・44頁の表に拠る。

11）8）155～160頁に詳しい。

12）拙稿「『大鏡』師尹伝－芳子関係記事をめぐって－」（「解釈」43巻7号，平成9・7）においては八の宮（永平）の出生を康保元年と推定したが，1）の甲斐氏の論の「藤原安子年譜」に所載の『延喜天暦御記抄』康保2年6月22日の条に「芳子の為に法性寺に如意輪法を修す」，同年8月10日の条に「御願により，芳子の為に法性寺に不動法を修せしむ」，同年11月7日の条に「芳子のために師尹第にて不動尊不断法を修す」とあり，『日本紀略』康保3年4月19日の条に「芳子腹永平を親王となす」とあるから，康保2年の出生，翌年の親王宣下と見るのが正しいと思われる。

13）『大鏡論』（昭和54，笠間書院）927頁。

14）拙稿「『大鏡』師尹伝－芳子関係記事をめぐって－」（「解釈」43巻7号，平成9・7）参照。

15）島田とよ子「藤原登子について」（「詞林」5号，平成元・4）。

16）保坂弘司著『大鏡全評釈・上』（昭和54，学燈社）423頁。

17）1）の新田氏の著，206頁。

18）『群書類従・第拾壹輯』所収。

19）5）に同じ，458頁補注（松村博司）。